【１班】（構成員：荒瀬委員、上田委員、高木委員、渡瀬委員）

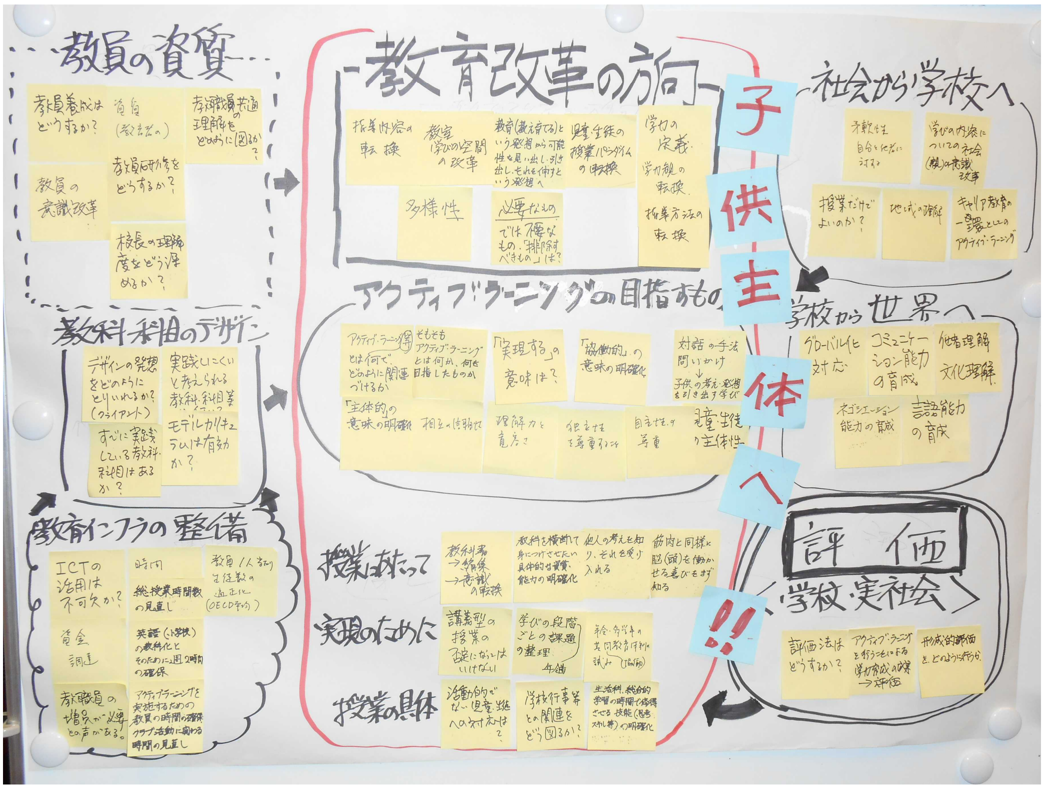
○　「学校から世界へ」ということを軸に、コミュニケーション能力、他者理解、異文化理解、ネゴシエーション、言語能力の育成などを学校で行うと、グローバル化の中でどのように広がっていくかということを考えた。一方、「社会から学校へ」ということで、今、社会から学校へ求められるものとして、柔軟性であるとか、学びの内容についての社会の意識改革、さらには地域との連携や、キャリア教育ということが必要だろうということとなった。

○　「子供主体へ」ということを考えると、まず、授業の具体から考えていくということが必要。児童生徒の対応をどうするかとか、学校行事をどうするかとか、生活科や総合的な学習の時間の中で、技能やそれから思考スキル等をどのように見ていくか。そしてその実現のためには、講義型の授業の否定だけにはならないようにしたい。さらには、学びの段階ごとの整理、教育の協働的体制をどのように試みていくか。そして、授業に当たっては、現行の教科書をどのように編集するか、それから教科書自体の考え方も変えたり、更には教科を横断させて身に付けたい具体的な資質・能力を明確にしたり、他者との関わり、また筋肉と同様に脳も動かすといったことで、そこから積み上げて、アクティブ・ラーニングが目指すものというのが出てくるということとなる。

○　アクティブ・ラーニングを実現するための、教育インフラの整備については、ICTの活用の問題、それから教員の増員、アクティブ・ラーニングをするための時間の確保、さらには総時間数の問題や、児童生徒数の適正化などの整備をする中で、教科・科目のデザインをもう一度図っていくということが大事。アクティブ・ラーニングを実践しにくいと考える教科・科目はないか、モデルカリキュラムを示すことが本当に有効になるのか、モデルカリキュラムをまねて、それで終わりということにはならないかどうかといったことも考えながら、全体のデザインを考えていく必要がある。そのデザインを考える中で、教員の共通理解を図り、教員養成・研修や意識改革、そして校長先生の理解度をどのように高めていくかということも問われると思う。

○　最後に、「教育改革の方向性」について。まず一番には、学力の定義。学力観が変われば、当然、指導方法も変わっていく。子供の立場からいえば、児童生徒の授業の捉え方、授業パラダイムそのものをどういうふうに転換していくか。それを考える上では、今まで必要だったものとそうでないものとの精査も必要になってくる。そのような、教室という学びの空間が、今までと同様であっていいのかということも考え、多様性を含めて、教育全体の問題を考えていこうと考えた。

※１班資料


教員の資質
教員養成はどうするか？
教員研修をどうするか？
教員の意識改革
校長の理解度をどう深めるか？
教育改革の方向
指導内容の転換
教室 学びの空間の改革
多様性
児童生徒の授業パラダイムの転換
学力の定義
学力観の転換
指導方法の転換
子供主体へ!!
社会から学校へ
授業だけでよいのか？
地域の理解
キャリア教育の一環としてのアクティブ・ラーニング
アクティブ・ラーニングの目指すもの
そもそもアクティブ・ラーニングとは何か、何を目指したものか
「実現する」の意味は？
「協働的」の意味の明確化
「主体的」の意味の明確化
相互の信頼性
理解力と寛容さ
自主性の尊重
児童生徒の主体性
学校から世界へ
グローバル化対応
コミュニケーション能力の育成
他者理解 文化理解
ネゴシエーション能力の育成
語学能力の育成
教科・科目のデザイン
デザインの発想をどのようにとりいれるか？（クライアント）
すでに実践している教科・科目はあるか？
モデルカリキュラムは有効か？
教育インフラの整備
ICTの活用は不可欠か？
時間
総授業時間数の見直し
資金調達
英語（小学校）の教科化とそのために週２時間の確保
教職員の増員が必要との声がある。
アクティブラーニングを実施するための教員の時間の確保 クラブ活動に関わる時間の見直し
授業にあたって
実現のために
授業の具体
講義型の授業の否定になってはいけない
学びの段階ごとの課題の整理
学校行事等との関連をどう図るか？
他人の考えを知り、それを受け入れる
筋肉と同様に脳（頭）を働かせる喜びをまず知る
教科を横断して身につけさせたい具体的な資質・能力の明確化
評価
〈学校・実社会〉
評価法はどうするか？
アクティブ・ラーニングを行うことによる学力育成の成果→評価
形成的評価を、どのように行うか。

【２班】（構成員：天笠委員、今村委員、松川委員、三浦委員）

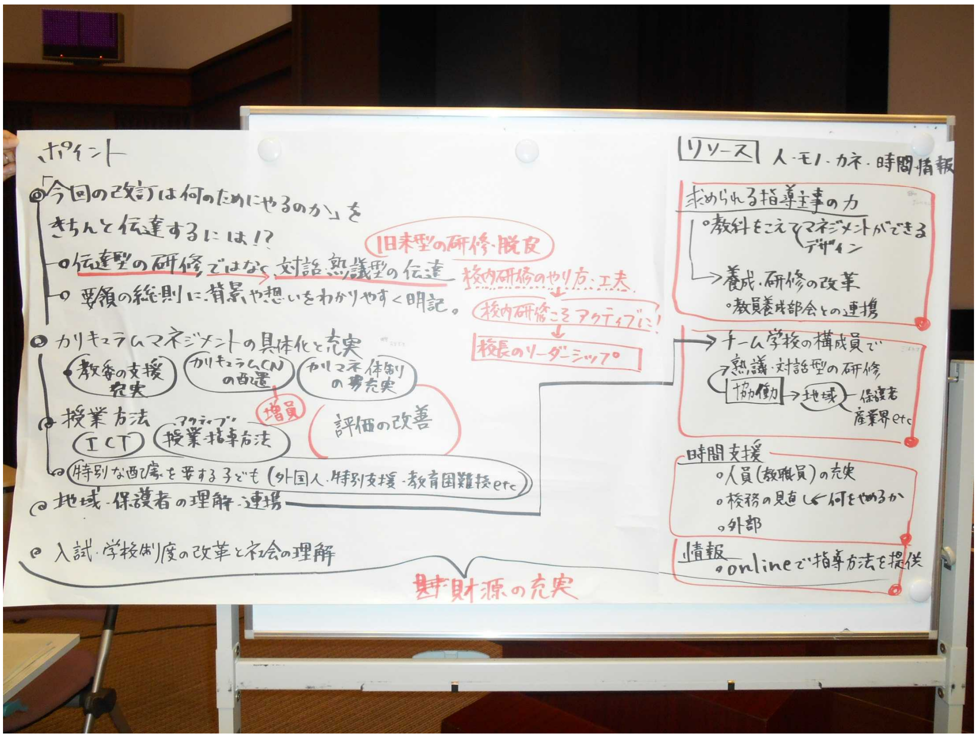
○　このグループの議論のポイントは二つ。一つは、この改訂は何のためにやるのかということ。その理念が伝わるということを一番大切にすべきで、アクティブ・ラーニングとか方法論は、その後、開発されていくけれども、時代的な背景も含めて、理念がどうしたら隅々まで伝わるのかということについてということが一番の論点。二つ目は、その理念が伝わった上で、どうしたら校長先生をはじめとした先生方のカリキュラムマネジメントが充実していくのかということ、そして、そのために社会がどんなリソースを学校や先生方に対して提供すれば、先生方を支援することができるのかということ、そんな形で、改訂の理念について、そしてカリキュラムマネジメントについてというところが、議論のポイントであった。

○　どのように今回の改訂の理念を伝えていくのかというところでは、旧来型の校内研修を脱皮して、学校の中で校内研修こそアクティブにして、どうしたらこの理念を全ての先生方が腹落ちするように伝えることができるのかということを検討した結果、熟議型、対話型で先生方が腹を割って話せるような校内研修を学校で行い、その教材として、この学習指導要領が使われてはどうかという話になった。もしかしたら議論のたたき台としての指導要領かもしれないなと思っている。総則の部分にも、背景や思いが分かりやすく明記されていることが大切だという観点も出た。

○　アクティブ・ラーニングの充実ということとカリキュラムマネジメントというのは、ある意味、重なり合うということで、その要件として、授業の方法の改善や、ICTの導入、あるいは特別な配慮を要する子供たちへの対応、そういう整理の仕方の位置付け、更には評価の改善。これらは校長先生を中心とした先生方、校内における先生方の協働を通して実現されるものであり、改めて校長先生のリーダーシップの必要性と大切さということを挙げた上で、その校長先生を中心とした先生方に対して、どうリソースを充てていくのかということを中心に検討した。

○　教育委員会からの支援として、キーパーソンとなる指導主事については、今回求められているような教科を横断したようなカリキュラムマネジメント、あるいはカリキュラムデザインができるようになるためには、それを指導できる指導主事が要るが、従来指導主事は、授業が得意な英語なら英語、数学なら数学の人がなっており、現実にはなかなか難しい。ただし、今、新しい試みとして、スーパーグローバルハイスクールとか、スーパーサイエンスハイスクールとか、スーパープロフェッショナルハイスクールなどで、新しいカリキュラムに取り組んでいる方たちの中から、将来、優秀な指導主事が出てくるのではないかというふうにも思っているし、また、その養成の段階、研修の段階での改革が必要であろうと思う。教員養成部会との連携も必要。国の教員研修センターにおいても、指導主事の育成について取り組んでほしい。

○　校長先生の力、そして指導主事の先生の力をきちんとサポートして引き出していくような仕掛けが必要であるということと、さらにチーム学校の議論で出ているような専門家の方々と、また地域の保護者の方々、首長、そして産業界の皆さんとも一緒に、この学習指導要領の改訂の理念を熟議するような研修会があっても、本当の意味で伝わっていくのではないかという話も出た。

○　また、最終的には、やはり学校は財源があって、人がいてというところが大切である。

<u>※２班資料</u>